

2021.08.25.  
T.,Kobayashi

「旅」この道の奥には何があるのだろう

初夏、遠くに富士山が見える気持ちの良い朝、知人の世話を得て船で隅田川を遡る。  
千住大橋で陸に上がり、日光街道を北に向かって歩いて見る。草加を経て春日部まで約 29Km の行程。

旅の二日目は栗橋の関所を通り間々田まで 35Km。  
江戸時代に出来た栗橋の関所は、利根川を渡る今の利根川橋の西岸にあり、関所を抜けると房川渡（ぼうせん のわたし）があった、渡った先（向う岸）は中田という所（現在の古河市中田）で、海拔 16m の真っ平らな水田地域。栗橋には房川という地名がないので不思議に思って調べてみた。  
その昔栗橋宿の法花房（ほうかぼう）という僧侶が一人で船を操り渡船していたところから「房川渡」の名がついたという説があるようだが、真偽は不明とされている。

三日目、小山、飯塚を経て思川を渡り、栃木市の大神（おおみわ）神社へ。  
昔は「下野総社大明神（別名：室の八島大明神）」と言われた。  
崇神天皇（十代天皇）の時代に豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）が東国平定を祈願して、大和国の磯城瑞籬宮（しきのみずかきのみや）の大三輪大神（おおみわのおおかみ）を勧請して下野の国府に程近いこの地に大神神社を創建したという言い伝えがある。  
主祭神は倭大物主櫛玉命（やまとおおものぬしくしかたまのみこと）で、配祀神は木花咲耶姫命・瓊瓊杵命・大山祇命・彦火々出見命。境内の池には浅間神社・二荒山神社・筑波神社・雷電神社・香取神社・鹿島神社・熊野神社・天満宮の八つの社が島として配置されているので「八島大明神」「室の八島」などの別名がある。  
この地は 1957 年に栃木市に編入され栃木市惣社町となったが、その前は下都賀郡惣社村と言った。東武宇都宮線の野州大塚駅の東側に広がる海拔 50m ほどの平坦地で、地図で付近を見廻すと「馬場」「鋳物師」「内匠屋」「宿」など目を引く地名が多い。  
大神神社を後にして、壬生から日光西街道に入り鹿沼を抜けて文挾（ふばさみ）が今宵の宿。この日の行程は、間々田から約 48Km。

日光まで歩を進め、二荒山神社近くに宿をとり、翌日参詣。この時期には男体山にはまだ雪が残っているのだが、昔はこの山を黒髪山と言ったらしい。文挾から二荒山神社まで約 21Km。

ここから東へ進み、海拔 250~280m ほどの峠をいくつも越えて矢板へ。そして黒羽街道に入り、箒川・蛇尾川などを渉って、知人が住む黒羽へ。途中で日が暮れてしまい農家に一夜の宿を願うことになる。  
翌日も黒羽を目指して歩き出したが、縦横斜めに分れる道が錯綜し分りにくいところが多く難波。野に草刈りをする男に頼んで、馬と子ども二人の力を借りることになった。  
大田原の集落から放射状に広がる街道とそれを横切っていく黒羽街道、地図・磁石を見ずに太陽の光だけをあてにして歩くとしたら、方向感覚の確保がかなり難しそうだ。  
人里に出たところで、約束通り馬の鞍に謝礼を縛り付けて二人の子らとも分れた。

黒羽は那珂川の畔、知人の家を訪ねて歓待を受ける。知人の弟宅に逗留することになり、付近の散策を楽しむ。那須神社は仁徳天皇の時代に創建された 1600 年余の歴史を誇る神社で別名を金丸八幡宮という。那須与一を祀った社としても有名。  
伝説上の人物ではあるが、平安時代鳥羽上皇の寵愛を受けた「玉藻の前（たまものまえ）」は狐の化身とされる妖怪。これが那須の殺生石伝説につながる九尾の狐。  
また 1186 年に那須与一が建立したと言われる光明寺は消滅してしまい、今では看板が残るのみ。

黒羽から那珂川を渡ってさらに東へ進み、八溝山地の懐に抱かれたようなところにある雲巖寺は臨済宗妙心寺派の寺。開山当時は永平寺などと並んで禅宗の四大道場とも言われた古刹。

九尾の狐の伝説を聞かされると行ってみたいくなるのが那須の殺生石。奥州街道を横切り北西へ約 40Km、那須岳の足元の温泉が湧き出る所。

那須の硫黄の香りから抜け出して再び那珂川へ戻り、那珂川を渡り山越えて伊王野へ。三蔵川の谷を遡り、海拔 500m 弱の峠を越えると「みちのく」に入る。ここまで来ると長旅の覚悟が決まってくる。峠を下って社川の谷に下りると白河の関がある。勿来の関（常陸からの入口）、鼠ヶ関（北国街道からの入口）と並んで陸奥に入る三大関所のひとつとされていた。ウツギの白い花の色からひととき寒いみちのくの雪景色を思い浮かべる。

北国に入ったという緊張感から着衣を正して、胸にウツギの花を飾ってみた。

関所を出て下って行き、阿武隈川を渡ると左に会津の山なみが、右には磐城・常陸などの山なみが広がる。鏡石町に鏡沼（別名：かげ沼）という沼がある。鎌倉時代に和田平太胤長が時の執権北条の悪政を正さんと立ち上がったが、事に至る前に発覚してしまってこの地に島流しになった。胤長の妻は夫の後を追って鎌倉から奥州へ旅立ったのだが、待っていたのは非業の死を遂げた夫の姿。もはや生きる望みはなしとして、沼に身を投げて命を絶った。彼女の懐にあった鏡が水底から怪しい光を発しているというのが鏡沼の言い伝え。

鏡沼は、東北本線鏡石駅から郡山方面に向かって線路沿いに 2Km ほどの所にある。地図で見るとよくわかるが、この辺りには天然の溜池が数多く存在する。湿地帯のため、水蒸気が上がり霞がかかった景色になったり、空気が澄んでいれば水面に映る風景が、鏡を散りばめたようで美しいとも言われている。

須賀川で知人を訪ねたら、「四、五日ゆっくりして行け」ということになり、結果として七日間の滞在となった。

知人宅を出て北へ向かう。20Km 弱歩いて日和田（ひわだ）を過ぎると、西に額取山（ひたいとりやま・別名 安積山）がよく見える。このあたりも沼が多いところのようである。

日和田という地名は、寛永年間以前の文献には「部谷田（へやだ）」と記されているが、その由来・起源などはよくわからない。

「みちのくのあさかのぬまのはなかつみ かつみるひとにこひわたるらむ」

と古今和歌集に歌われている安積沼は、安積山の麓から日和田まで7Km ほど続く大きな沼だった。慶長年間（1600 年代）まではあったらしいが、今はもう存在せず、跡地を示す看板が立っているだけ。国土地理院の地形図を見ながら想像を広げてみると、東北本線日和田駅周辺から磐越東線喜久田駅を経て西へ遡る藤田川と五百川の沿岸に広がる農地が沼の跡なのかも知れない。湿原が経年変化して枯れてしまったのか磐梯山の噴火と関係があるのか。

古歌に出てくる「花かつみ」とは何か。幻の花とされているが、明治天皇の東北巡幸の折り、「菖蒲に似ていと小さき花」である「ヒメシャガ」を「花かつみ」として天覧に供した。この出来事以来「花かつみ」は「ヒメシャガ」であるとした説が定着し、昭和 49 年に「郡山市の花」に制定されもした。

二本松で奥州街道を離れて東に進路を変えて、阿武隈川を渡ると「黒塚の岩屋」がある。

京都のさる公家屋敷の乳母（名を岩手と言う）がいた。育てていた姫が重病に罹り、易者に見てもらったところ「妊婦の生き肝」を飲ませれば直るとの託宣。妙薬を求めて旅立った岩手が辿り着いたのは奥州安達原。

岩屋に潜んで機を伺っていたところへやってきたのが旅の夫婦。一夜の宿を求めて入って来た若夫婦を泊めてやったのだが、その夜若妻は産気づく。夫が産婆を探しに飛び出したのを好機として、岩手は若妻の腹を割いて生き肝を手に入れる。若妻は、「幼い頃に生き別れになった母を訪ねて京からこの地まで来たのに逢うことが叶わなくなった」と語り、息絶えた。岩手が若妻の荷物を改めて見ると、お守りが出てきたのだが、何とこのお守りから、昔別れた自分の娘であることがわかった。驚愕と哀しみのあまり気が狂い、岩手は鬼婆と化した。そしてこの岩屋に籠もり、旅人を襲って生き血を吸うようになった。

というのが「安達ヶ原の鬼婆」伝説のあらましで、その岩屋がこれだということになっている。

再び奥州街道を北進、福島へ出て阿武隈川を渡り東に進むと、文知摺(もちずり)という所がある。海拔 200m ほどの山に貼り付くように曹洞宗の寺安洞院が建っている。文武天皇の御代(700年頃)、この地に行基により聖観音が安置されたことが寺の始まり。1500年代になって陽林寺が開山し、のちに文禄4年(1595年)に陽林和尚によって安洞院が開山された。

この地に、絹への染色の技法として「もちずり(文知摺)」というものが古くから伝えられている。文様のある石に繊維を押し当ててその上から忍草の葉や茎をこすりつけて染色するという方法で、この時に使われる石を文知摺石(もちずりいし:別名 鏡石)という。

貞観年間(860 年頃?)に按察使(あぜち)としてこの地にやって来た源融は、村の長者の娘虎女と出会う。やがて任を終えた彼は再会を約束して都に帰る。虎女は再会を願って文知摺観音に百日参りの願をかけたが、満願になっても彼は帰って来なかった。悲嘆にくれた虎女がふと文知摺石に目をやると、融公の面影が石の上に浮かび表われた。やがて病の床に伏してしまつた虎女のところへ都から届いた源融公からの便り。したためられていた歌が、古今和歌集にも残されている。

「みちのくのしのぶもちずりたれゆえに みだれそめにしわれならなくに」

阿武隈川の東岸を北に向かって歩くと、月の輪という集落がある。昔は、集落を抜けた所で川を西岸に渉れるようになっていた。「月の輪の渡し」という洒落た名前の渡船場があったそうである。

月の輪という地名の由来は、暴れ川阿武隈川が氾濫を繰り返す度に三日月湖を作つたことによるという説が主流らしいが、本当だろうか。地名が誕生したであろう時期と「三日月湖」という言葉が作られたであろう時期とを並べて考えて見ると、何となくすっきりしないものがある。

川を渉ると瀬上(せのうえ)の集落、奥州街道を横切って西へ飯坂に向かう。

奥州藤原氏の家臣で、後に源義経と行動をともにした佐藤継信・佐藤忠信兄弟の父親である佐藤基治(庄司)の旧跡が近いとのことなので、行ってみる。佐藤庄司の居城であつた大鳥城は飯坂温泉駅の西方にあり、1185 年に源頼朝の軍勢に襲われて消滅、今は館の山公園となっている。佐藤忠信は、「義経千本桜」「狐忠信」などでまだ生き残つて活躍している。この日は飯坂温泉に一泊。

飯坂温泉から東へ進み、桑折(こおり)で奥州街道に戻る。現在では街道の他に東北本線・東北新幹線・東北自動車道の三本が並走しており、このあたりの景色は一変したに違いない。街道を北へ進むと西側から張り出す山の麓をかすめるように、あたかも三匹の蛇が競い合うように走っている。最も大きく蛇行するところに大木戸という地名が残っているので、恐らくこの辺りに伊達の大木戸があつたのだろう。

厚樫山(288.9m)の麓に阿津賀志山防塁跡がある。平安時代後期に作られたもので、奥州藤原氏の手による防御を目的とした拠点が発掘されていたことを示すもの。山の端から阿武隈川の岸まで約 4Km にわたって築かれており、二重の濠と三重の土塁からなるもので、国の史跡に指定されている。付近に、昔軍事拠点を含み集落があつたことを示すような地名がいくつも残されている。

山は切り開かれて町が作られたりして、現在の風景から昔の風景を想起することが難しくなつてしまつたのはこの辺りに限つたことだけではないと思うが、阿津賀志山防塁跡を過ぎると山間に入り海拔 200m程度ではあるが峠を越えて越河(こすごう)の町に入る。面白いことに、峠下に大きな集落があるが、東北本線越河駅周辺には顕著な集落が感じられない。

ここはもう宮城県白石市になる。右手の山並みをいくつか越えると、小学校5年生から6年生の間を過ごした懐かしい大張の里がある。遂にここまで来てしまつた。

今日の宿は白石に確保した。昭和30年代に戻つて、懐かしの村へ寄り道してみるのも悪くない。

こんな旅をしてみたいと思ったことが何度もあった。松尾芭蕉の「奥の細道」を辿って歩いて見る。歳を重ねた後にこんな旅ができたら面白いだろうなと思ったことは何度かあったが、今日現在実現していない。芭蕉の足取りの部分部分は我が目でも見たいと思って、これまでかなりの旅に折り込んだ。中学・高校で国語の授業で習った松尾芭蕉の「奥の細道」、その後登山や旅行で各地を巡ることが多くなり、旅に出る前に参考に目を通してみたくなって買った何冊かの「奥の細道」本の内のひとつが手元に残っていた。この夏、書架の古い本を整理して、残す物と捨てる物に分けたり、痛んだ書籍を補修したりして見た。荻原井泉水著「奥の細道風景」、「曾良随行日記」も合わせて何度か目を入れた本の一冊である。巻末に付いている「奥の細道」原文を読み直してみた。意外にやさしく読むことが出来た。読んでいる内に、その中に出てくる地名や施設名を地図上で確認してみたり、さらにその奥にあるものを探ってみたり、面白さが増してきた。ならば、自分が同じコースを辿ってみたらどんな旅ができるのだろうか、考えている内に手が動き出した。主要な場所での出来事の中で可能なものについては、芭蕉の体験を自らの動きに移植してみた。芭蕉の記録(奥の細道)は要所のみしか書かれておらず、自らの思い入れの強い部分に偏って記されている。「曾良随行日記」を併読すると経由地や主要道路からの曲がり角の説明など細かな出来事の走り書きがあり、意外なことが記録されていて面白い。この二つを頼りに地図を眺めながら進んで行くと、自分が主人公で旅をしているような気分になることが出来る。このまま更に先へと歩を進めて行くと面白いかも知れないが、深入りしすぎて時間がなくなりそうなので、適当なところで締めくくりにした。「みちのく(陸奥)を訪ねる旅」。「みちのく」とは「道の奥」であり、「道の奥に向かう旅」に「奥の細道」と名付けた松尾芭蕉に改めて洒脱さを感じた。

以上